

記譜プロジェクト「伝統音楽の記譜法からの創造」

2021 年度活動報告

本研究は 2019 年から引き続き実施しているものである。

主要なテーマは、中国の伝統楽器であり伝統音楽である古琴（琴・七弦琴）の記譜法と伝承の形態についての検討である。

古琴は中国の伝統楽器であるが、日本にも伝来し、平安時代と江戸時代を中心に演奏・継承されてきた。その楽器の特性から、独自の記譜を有してきた歴史があるが、従来の記譜法と近年の演奏方法、特に指遣いに関しては乖離があるのではないかと考えられる。そこで、2019 年度から、北京在住で中国の国家級非物質文化遺産古琴芸術代表性传承人である吳釗氏に講演等をしていただいている。

2019 年度は本学に招いて吳釗氏に講演していただいた。2020 年度も講演を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の流行により、来日が叶わなかったため、2019 年度に実施した講演の録画を編集し、公開準備を進めているところである。

2021 年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症により来日できない状況であるため、吳釗氏が 2020 年に文化芸術出版社より出版された『古楽尋幽—吳釗音楽学文集』（ISBN：9787503968143）に掲載されている論文「試談古琴減字譜の創制問題」（古琴の減字譜の創造に関する試論）を翻訳することにした。

減字譜は古琴の独自の記譜法で、漢字の一部を記号化し、その組み合わせによって奏法を示すものである。唐代以前は文字譜と称される、奏法を言葉で説明した譜が使用されていたが、左右それぞれの手の奏法を文字で示すと非常に煩雑で、長くなるため、唐代中期頃により簡略化した減字譜が発明され、以来文字譜に代わって減字譜が使用されるようになった。宋代以降は完全に減字譜に移行し、現在に至るまで減字譜が使われてきた。近年中国では、伝統楽器の記譜法も変化しており、数字譜や五線譜を使用することが増え、独自の記譜を使用する機会が減ってきているとの指摘もあるが、古琴は未だに減字譜を利用することが一般的である。ただし、文化大革命（1966-1976）以後、古琴の奏法が変化していく中で、減字譜の本来持つ意味から乖離し、減字譜が奏法をも含めた意味を持っていたものから、単なる記号へと認識が変化したのではないかと推測される。

当該論文は、減字譜の創成に関する考察ではあるが、前提となっている減字譜の本来の意味・意義を再検討するものであると考えている。

現在、翻訳を遂行中であり、完成し次第、諸手続きを経て、当センターのホームページにアーカイヴとして公開する予定である。

武内恵美子（日本伝統音楽研究センター准教授）

